

中村俊定文庫
文庫 18
698



本	函
世	四
號	
冊	一
冊	

墨貳壹七九

源和社



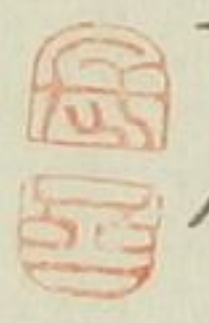
その、美あよりけむいな
 秋の山升六
 我、りひもる為まほそ
 秋の月梅價
 さも解し、の秋を止
 及や、山家小あ丸
 するとして、まの戸
 ぬるすも、とくれ
 暮陞
 うて、か摺を、だし
 秋のふら
 長齋



何處も灯の山家よきて松の風自樂



丁巳仲高寫于
 久遠堂中長齋



何きのみ羽ひやくとをくたき

自樂

朝をくぬきと島や海の月 長齋

標ぬきの深白ふかきむらに 升六

何の目かてるこそ牛の義 樂

こころの振のちち道たさて 齋

標きぬちちの骨をささむは 六

石はたのけしら斗をさすはなぬ 樂

石解るる水戸にゆくるる能 齋

こころよねもあんのをささむは 六

ありまゝのくもをよき

くもくも縁の境ろくあり

人のこころくもるの正月

あら梅の性わら猫をくもつ事

そのとめをき陽の井戸

配杜氏の方町の酒を嗅ぎぬ

ゆきもきき新日の風

雪の月柳を柔にうくれたり

寝湯流せば蝉のなく

樂

齋

亡

樂

齋

亡

樂

齋

亡

野をく月宮なまむ 二日うれふ

朝う日の影よわたりはる朝日か月居

火のともはうと秋持のあめさ式丈左

たゞしそんましとこれ八目くうは成美

雲の戸はありとさやなれき道彦

能おもくあるも 居よの秋房士郎
名月の井 ともてら守 深山式 可都里
秋と秋のけりうれ中もあおのち 素ふ架
むしきめのこね 添りり 矢の川 蕉雨
うそかぬの風まうらぬ 奉もな 斗入
虫つら きののころれをみねうれ 蒼帆
後の月 長 輝 我よともまわり 青橋

むしきよの秋なるはなをさの春 藍堂
七月や海山しよめ 秋の月 田禾
きよきのき きの秋の初ねか 喜齋
美しよはほえの初く 秋き 大江丸
秋のあらしけ 雨を 新 たり 橋亭
きよき 秋き 秋の目 和 方中
きよむらあそひの 日 たり 折れり 如 龍

雪やこのふもみ〜にさぬさ花海
秋のつふねは海の日を〜りとも
湖を白〜れ八月有れ升六

寛政九丁巳秋仲

自樂編

書林

大坂新うつ不所
丹波屋傳之坊

